

第Ⅱ部 地域の診断と計画構想

——南スマトラの事例研究——

コムリン・オガン川流域の地域構成

北村 貞太郎*

Region Structure in the Komerling-Ogan River Basins

Teitaro KITAMURA*

は し が き

地域計画の構想を立案する上で、非常に大切なことは、計画地域内の構成¹⁾を組み立てることにあるが、計画された地域構成が往々にして計画者の達観的な判断で定められることが多い。しかしながら、いずれの地域にも永い歴史が秘められていることを考えるならば、こうした判断もできる限り、科学的根拠に裏付けられたものであることが望まれる。

本報は、そのような場合に必要とされる計

画的な地域区分を析出する方法についての1研究事例である。また、ここで述べた地域構成は地域計画の粗い構想を立案することを前提としている。したがって、地域構成分析としては、資料的には不十分な点もあったが、データの少ない比較的開発の遅れた地域におけるこの種の分析に関する方法の可能性を検討してみたものである。

I 地域構成要因と調査単位

地域構成上要因には次に掲げるものを取り上げた。²⁾

* 京都大学農学部; Faculty of Agriculture, Kyoto University

1) 本報でいう地域構成とは、対象地域にある最小の地域単位と全対象地域との階層的な関係性をいう。地域の階層的な関係性とは最小地域単位がいくつか集まり、一つのまとまった1ランク上位の地域を形成し、そうした地域がまたいくつか集まってさらに1ランク上位の地域を形成するという関係で、次々と地域が階層的につながっていることをいう。具体的には、対象地域がどのような下位地域で構成され、それらが相互にどのような関係にあるかという対象地域全体の構造をいっている。

- (i) 自然的要因 地形、地質、土壌、土地利用、水利用
- (ii) 社会的要因 人口、地方行政組織、社会構成、言語
- (iii) 生産・生活関連要因 水稻、ゴム、

2) 自然的要因の中で、植生についても考慮すべきであるが、山田 [1] の考察が主として北部低湿地に限定されたことと、このレベルの地域構成分析では土壌に関する古川 [2] の考察で十分と判断したため省略した。また社会的要因の中で宗教についても考慮する必要があるが、本地域では宗教がほぼ回教に限定されていると判断されたため、宗教的には地域が均質であるとみなした。

コーヒーなどの農業生産、テレビ数

(iv) 交通 道路, 水路

調査地域はパレンバン南部の OKI 地域 (Ogan Komering Ilir) と OKU 地域 (Ogan Komering Ulu) の領域に限定した。また調査上、資料収集単位はわが国の市町村に相当する、行政上の最小単位である Marga (マ

ルガ) とした。

自然的要因は主として地形図、地質図により、その他は古川 [2], 海田 [3], 高谷 [4] の報告を参考とした。社会的要因は坪内 [5], 三谷 [6] 報告のほかに人口は Marga ごとのデータ調査³⁾によった。生産については高谷 [4] 報告を参考にするとともに人口と同じく Marga ごとのデータ調査によって得たものである。

II 地域社会の階層性

わが国で地域計画を構想する上で前提としている大まかな地域社会の階層性は、隣組——農業集落(または町内会)——旧町村(小学校区)——新市町村——広域市町村圏(旧郡)——県といった体系として理解されている。

ところが、発展途上国においては、こうした地域社会の階層性自体が不明確である場合が多い。そこで、ここでは社会的要因として、人口および言語の分布、並びに行政区域をとりあげて、大まかな地域社会構成をみる。

II-1 人口の分布

本地域の人口のヒストグラム(図1)で見ると Marga 単位では人口5,000~10,000人のところが全体の32パーセントを占め、人口密度でも Marga の60パーセントまでが20人/km² 以下である。

地域別の人口分布をみると図1に示すとおりである。5万人以上の Marga は 4 Marga で、それぞれタンジョンラジャ (Tanjung Raja) 65千人、チュンパカ (Cempaka) 54千人、ブアイプムカバンサラジャ (BPBRaja) 80千人、プムルタン (Pemulutan) 52千人である。全体的にみて、OKI ではプムルタン、タンジョンラジャ、カユアグン (Kayu Agung) がコムリン (Komering) 川とオガン (Ogan) 川の人口集積地として、パレンバンの影響を

受けている。さらにパレンバンの影響を受けているとみられるのは比較的台地の多いタンジョンバトゥ (Tanjung Batu), プガガンイリルスク I, II (Pegagan Ilir Suku I, II), シラプラウパダン (Sirahpulaupadang), ジェジャウィ (Jejawi) である。これとやや離れた人口集積地はブンクラ (Bengkulah) である。したがって、OKI ではタンジョンラジャ、カユアグンが中心となり、周辺にタンジョンバトゥ、ブンクラ、プムルタン、シラプラウパダンなどの人口集積地が分布する。

一方、OKU ではバトゥラジャ (Batu Raja), ブアイプムカバンサラジャ (中心地はムンチャクカバウ, Muncak Kabau)—マルタプラ (Martapura) の2中心地のほかに、チュンパカ、ブリタン (Belitang), ブアイプマチャ (Buay Pemaca), ブアイラワン (Buay Rawan), ラナウ (Rantau) などが中心地とみられる。プラウブリギン (Pulau Bringin) やムアラドゥアキサム (Muara Dua Kisam) にはこれといった人口集積はみられない。

II-2 言語分布

言語については三谷 [6] が詳細に論じてい

3) ここでデータ調査とは調査員が各 Marga に向き、人口、土地面積、就業人口、農業生産、生活状況などのデータを収集したものをいう。

北村：コムリン・オガン川流域の地域構成

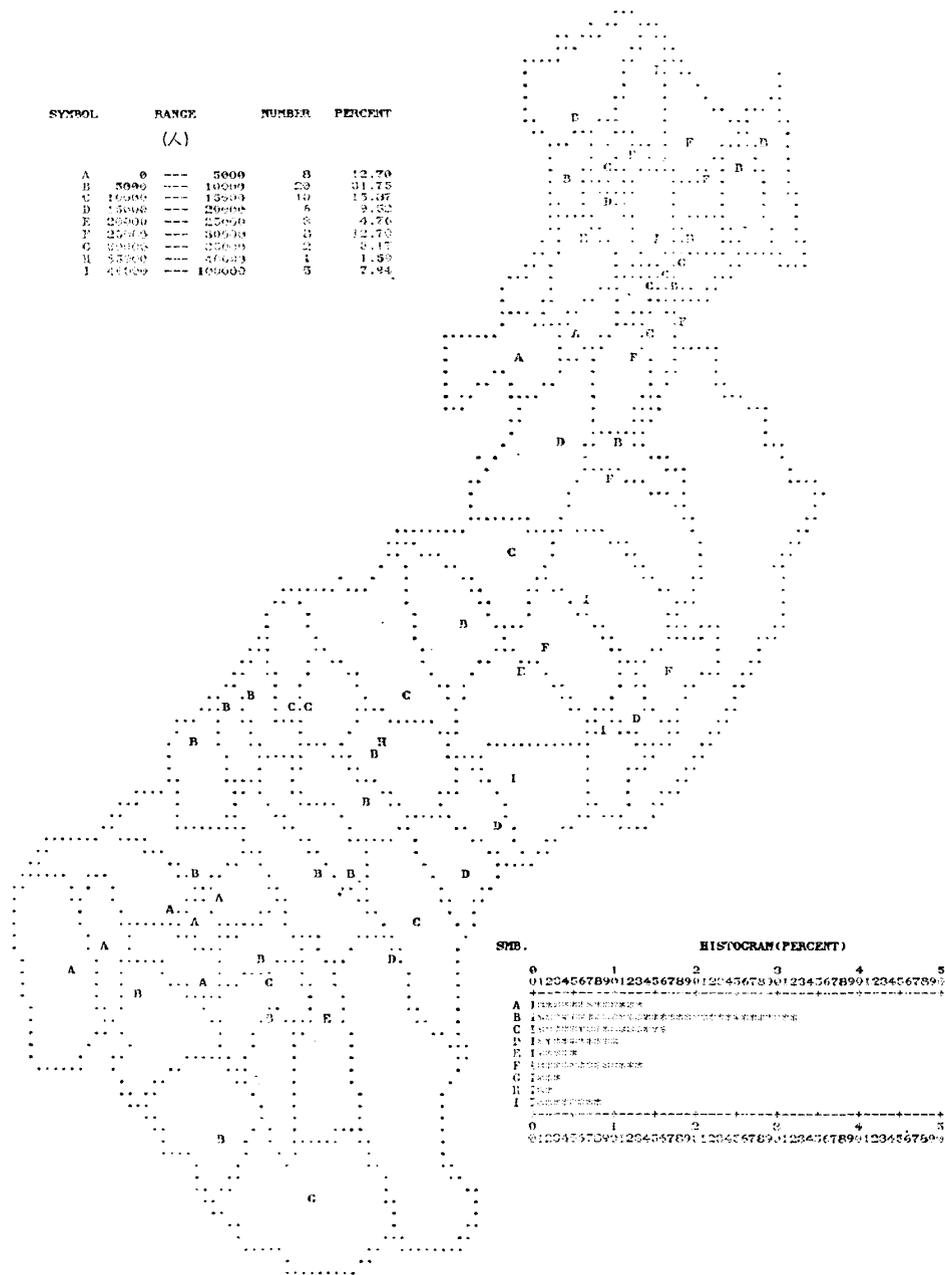


図1 人口分布

るが、全体的にマレー語系で、一部はランポン語系である。前者にはオガン語、スムンド語といった区別があり、後者にはコムリン語、ダヤ語、ラノウ語などがある。

すなわち、OKU の言語分布は大別すると、バトゥラジャを中心とするオガン語、シンパマルタプラあたりまでのコムリン語、ムア

ラドゥア、シンパンのダヤ語、南部にあるラノウ語、スムンド語、およびブリタンの移住民のジャワ語に分けられる。

一方、OKI では言語分布を分離するのがむずかしいが、カユアゲンが少々特殊なランポン語系であるほかは、大体マレー語系のものである。その中ではタンジョンバトゥのプ

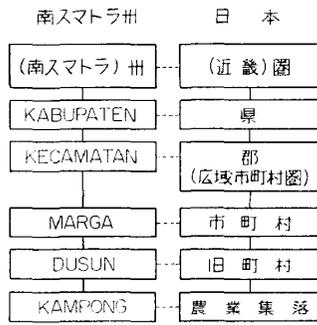


図2 社会構成の対比

ナサク (Penasak) 語が比較的是っきり分かれ、ムアラクアン (Muara Kuang), プガガンウル (Pegagan Ulu), プダマラン (Pedamaran) がオガン語系であるのを除き、その他は必ずしも明確でない。

II-3 行政区構成

本地域の行政区の構成を日本の場合と対比してみると図2に示すとおりである。

わが国の農業集落的概念で把えることができる地域構成上の単位は Kampong (カンポン)⁴⁾であり、それがいくつか集まってできているのが Dusun (ドゥスン)である。Dusunはどちらかといえば自然発生的行政単位であり、わが国の旧町村と似ており、それらが集まってできている Marga は今日のわが国における合併市町村という意味合いに近い。わが国の場合は Marga (市町村) と県との間 (郡に相当) に行政上の単位はない

4) その他 Kampong に相当する集落単位はタラン (Talang), ウンブラン (Umbulan) などとも呼ぶが、ここでは Kampong で代表する。[5]

が、南スマトラの場合には Kecamatan (クチャマタン) という行政府がある。ここには政府から役人が派遣され、行政上の最終末端となっている。

II-4 地域社会区分

上述した三つの地域社会の要因からみた範囲で、等質的な地域社会の区分を試みると、およそ図3にみられるとおりである。

この区分は Kecamatan 単位をいくつかまとめた構成であり、OKI, OKU 内で10地区に分けられる。この区分は言語区分に人口集積地のあり方を重ね合わせ、それに Kecamatan 構成を加えてある。言語によってまとめた Kecamatan を構成するものには OKU ではスムンド語, ダヤ語, オガン語, コムリン語であり、いずれもその境界が Kecamatan の境界に近くなっている。OKI でもプナサ

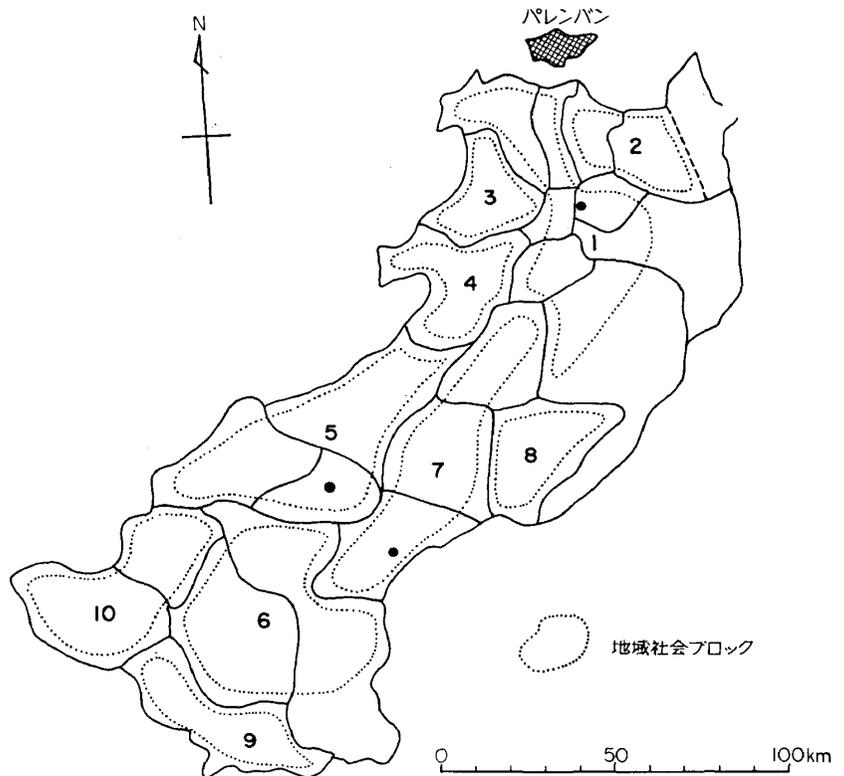


図3 地域社会構成

ック語はほぼ一つの Kecamatan である。

こうした点からみると、今日ある Kecamatan は歴史的には言語などの等質性のつな

がりから徐々に形成されてきたことがうかがわれる。

Ⅲ 自然的地域構成

原始的な人間生存の必須条件は水と食糧の確保であり、次いで、野獣、病気、災害などに対する人間の安全性を確保することであったことは周知のことである。そうした人間生存の必須条件は人間が意図した定住地において、人間の技術力によって何らかの形で獲得されてきている。そこで大きな役割を演じた人間の技術力は、ただ先天的に賦与されてきたものではなく、与えられた自然的地域条件を人間が克服してゆく過程の苦しい自然との争いから生まれてきたものである。したがって、人間の生存への条件が整い得る場所は山地にも低地にも多く見出されるが、そこで、人間生存を確保した暁にみられる人間の技術力・生活習慣は、それぞれ異なっている。技術力は各人間集団に独特なものを生み出し、それにともなって人間の集団化が促進されてきたと解釈できよう。

したがって、上述した地域社会の形成も、実はかかる自然条件に規定されて生まれてきたものであると想定される。⁵⁾ その意味で、上述した地域社会の背景となる自然的地域構成を確認しておくことは、将来の地域社会のあり方に関するもっとも根本的な知見を提示することとなる。

自然的地域構成をみる上でもっとも基本的な要因は、地質、地形、気候の一体化した条件である。気候については小地域の場合均質とみられるとして、地質と地形が第1の自然的な要因といえ、第2の要因は水である。第

1の要因に規定された水条件によって、人間の生存の形態が生み出される。第3の要因として土壌と植生が浮かび上がってくる。こうした三つの要因の組み合わせがいかにこの地域を構成せしめているかをみることにしたい。

Ⅲ-1 地質・地形

地質学的構造が地域の地形形成上の原点となっているが、本地域についてもそのことがいえる。

本地域は海田が述べるように、山地、丘陵、氾濫原、閉塞低地およびパレンバン近傍台地に大別できる。それをさらに、分水界によって区分すると、表1に示すような結果となる。

こうしてみると、コムリン語系、オガン語系、スムンド語系の大半の言語圏はこうした自然的条件に規定された状況、人間の活動のしやすさによるまとまり、がはっきりみられる。

コムリン川最上流部で、Kecamatan プラウブリンギン、Kecamatan ムアラドゥアキサムおよび Kecamatan バンディンアゲン (Banding Agung) の Marga ムカカウイリル (Mukakau Ilil) はスムンド語系である。このうち、Marga スンガイアロ (Sungai Aro)、シンダンダナウ (Sindang Danau) だけはアロ川の水系となっている。しかし、いずれも、山地部ではあるが比較的標高差が少なく、相互の交通が馬によって可能であったため、分水界をはさみながらも一つの圏域を形成している。その他はほとんど分水界で、コムリン語系とオガン語系が分離されている。

5) 自然条件を全く無視して生まれたものもあるが、多くの場合、自然条件に規定されている。

表1 地形による地域区分

地形	分水界	ほぼ該当する Kecamatan (K) または Marga (M) 名*		
		Komering 水系	Ogan 水系	その他の水系
山地		K. Banding Agung K. Muara Dua Kisam M. Mukakau Ulu		M. Sungai Aro M. Sindang Danau
丘陵		M. Buay Pemaca Kota Martapura K. Cempaka K. Buay Madang	Kota Batu Raja K. Pengandonnan M. Lenggayap M. Kiti K. Peninjanan M. Pambang Suku IV	K. Belitang
低地		K. Kayu Agung K. Tanjung Lubuk K. Pedamaran K. Sirahpulaupadang K. Panpangan	M. Muara Kuang M. Lebuk Keliat K. Tanjung Batu K. Tanjung Raja K. Indralaya K. Pemulutan	

* Kecamatan の中が地形的に同一内のものは Kecamatan の名を，地形的に異なるものは Marga 名を書く。

III-2 水 文

上述した自然的地形区分は，水文的地域条件をほぼ定めている。水文的にみた定住条件の一つとなる生活との関係を見ると，山地部を除き集落の立地がほとんどコムリン川，オガン川沿いにあり，原始時代的定住の原型が今なおここにみられる。生活はすべて，この水との関係で成り立っている。交通は水路により，これらの河川が交通手段となっている。

タンジョンラジャ，カユアグンはオガン川とコムリン川が非常に接近する部分に当てっており，人々の交通からいって，ここに人口集積がもたらされるようになることは想像に難くない。シラプラウパダン，パンパンガン (Panpangan) は低湿地の中でも比較的高いところが多く，定住地が見出しやすかったようである。

特にカユアグンを中心とする低湿地はいろ

いろな意味で住みにくいところであるにもかかわらず，かなりの定住がみられるのは，いわゆるルバック (lebak) にみられる独特の稲作栽培技術をもっていたためとみてよからう。乾期，雨期という自然の水条件の変化に巧妙に合わせた住民の智恵である。これが後述する (図5) 水田 (sawah) 圏として浮かび上がってくる。同図からして，こうした条件はコムリン川全体の河川沿いにみられるが，上流に行くにつれて量的に減少し，Kecamatan チュンパカのスムンダワイ III (Semendwai III) あたりから丘陵部に移ることが，水文を通じた水田圏の分布から明瞭に読みとれる。

III-3 土 壤

土壌は古川[2]の考察からわかるように，上述した地形条件を明瞭に反映し，各地域の自然条件を形成している。そしていくつかの点で，自然的地域区分の内容を補足的に明らか

にする。その一つは、タンジョンバトゥやパンパンガンがパレンバンにみられる台地的特性(準平原)をもつことである。このことは、後述する水田面積分布(図5)でもわかるように水田面積が少なく、この点を説明している。

第2の点は、先の地形分布の丘陵部として不明確であったムアラドゥア(Muara Dua)を中心とした地域である。古川によればガルバ(Garba)山地、ムアラドゥア・シラス台地、ダヤ(Daya)およびキサム山地の部分である。この地域はほぼKecamatanムアラドゥア、Kecamatanシンパン(Simpang)に当る地域で、言語的にはダヤ語圏である。

ここは、後述するコーヒーの分布をみると山地的性格をもつ地域で一つのまとまった圏域形成のメルクマールとなるものとみられる。

第3点は、先の地形区分ではみられなかった内陸河谷平野の分布である。これがコムリン川沿いのKecamatanマルタプラ、Kecamatanブエイマダン(Buay Madang)、KecamatanチュンパカおよびKecamatanブリタンにおける水田分布を裏付けている。

Ⅲ-4 自然的地域構成

上述してきた自然的地域構成をとりまとめ

Ⅳ 生産と生活と交通

自然的地域構成はそれぞれ特色ある地域社会構成を生み出してきており、地域の生産なり、生活はそうした地域構成の結果といえよ

う。次にそうした地域状況を農業生産からみ直し、さらに地域構成を識別する上での根拠としておこう。

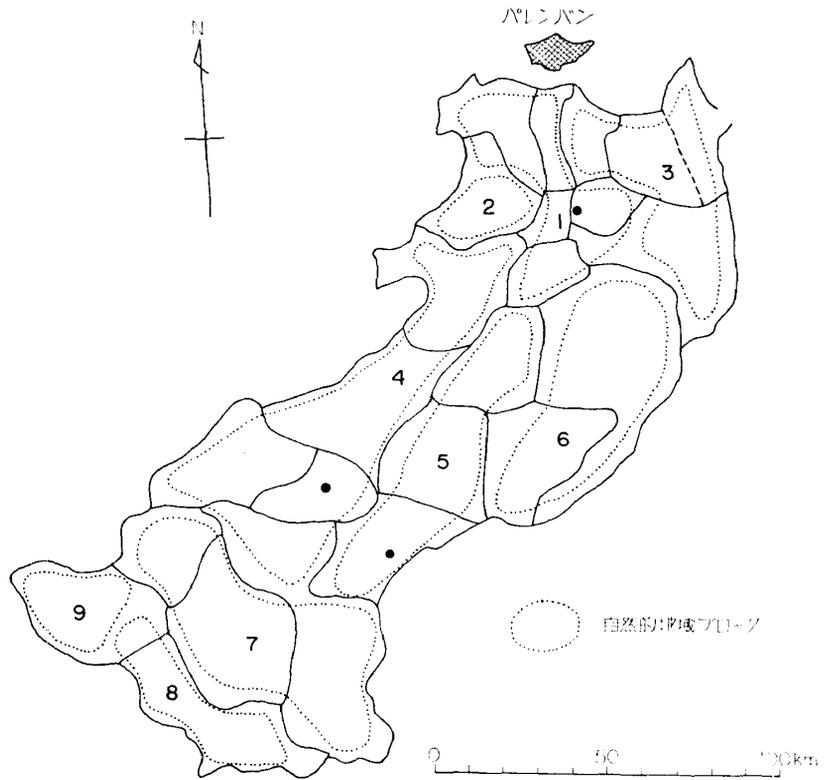


図4 自然的地域構成

ると、図4に示すとおりである。

この図を社会的地域構成と比較して、Kecamatanレベルの地域単位で、かなりよく一致していることがわかる。このことから、社会的地域構成が自然的地域構成に相当程度影響を受けていることがうなずける。それは先述した自然的な地域を人間が克服する過程で産んできた技術力の発達にともなって生まれてきた人間集団の歴史的な所産というべきものであろう。

IV-1 稲 作

稲作については高谷 [4] が詳しく報告しているが、ここでは地域区分の上での一つのメルクマールとしての考察に留める。

低地の稲作は OKI のコムリン中流域にみられるルバック型稲作である。

コムリン川下流、オガン川下流、特にカユアグンを中心にみられるルバック型稲作体系はこの地域の特色である。コムリン、オガンの両河川がパレンバン、パンパンガンの丘陵に閉ざされ、地域全体が浸水状態となる。その水は乾期になるのを待って、徐々に排水してゆく。稲作はこの排水状況に合わせて営ま

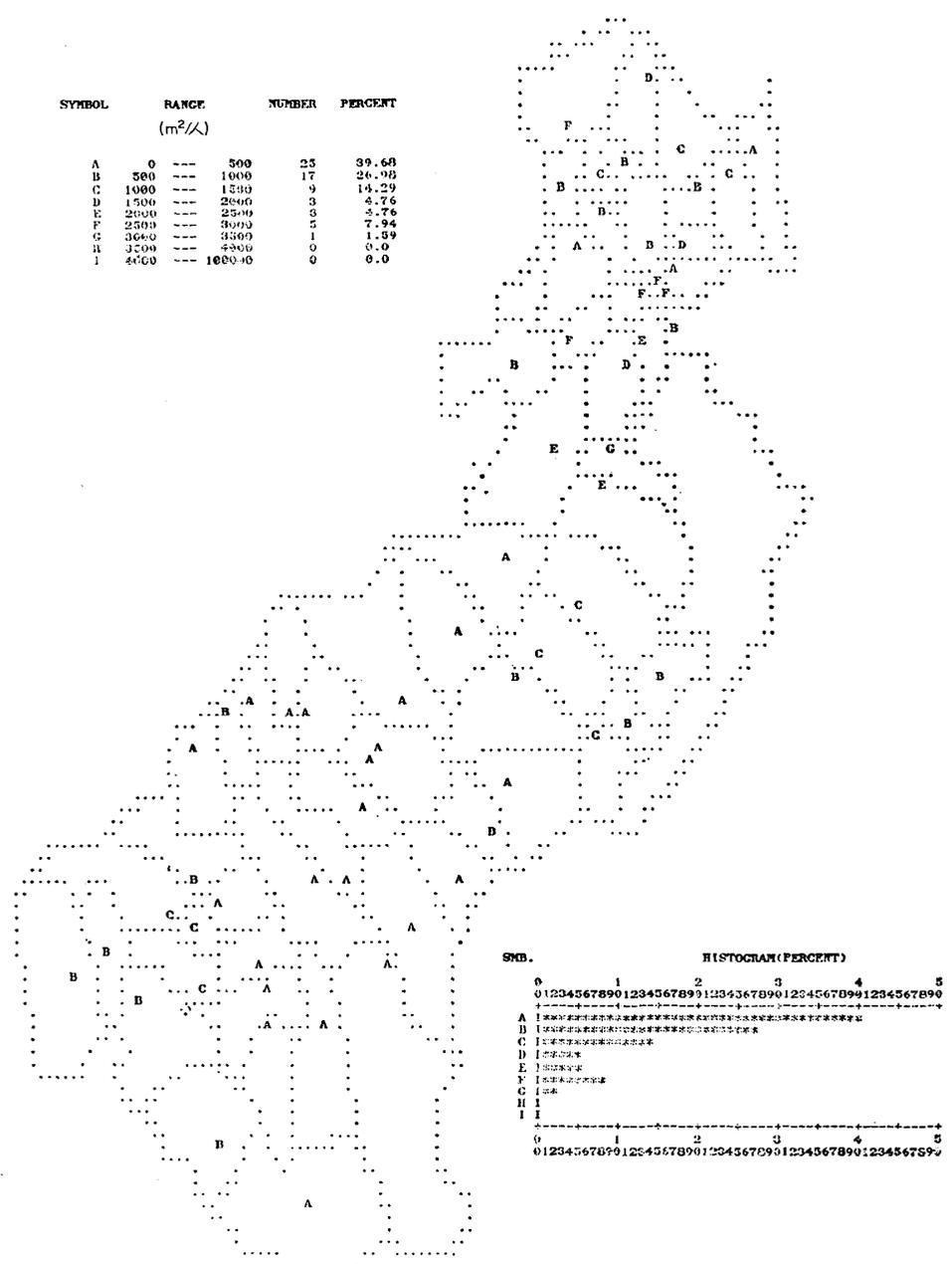


図5 水 田 面 積 (m²/人)

られる。その他の地域では、古川がいう内陸河谷平野であるコタ・マルタプラ (Kota Martapura), ブアイマダン, ブリタンには 500~1,500m²/人 の水田がみられる。

一方、陸田 (m²/人) の分布は図6に示すとおりであり、OKIのタンジョンバトゥ, シラプラウパダン, パンパンガンを除いて、ほ

ぼ水田分布の裏がえしになっている。

したがって、水田と陸田の合計面積は先に述べた人口集積地、タンジョンラジャ, カユアゲン, バトゥラジャなどとパレンバン近郊の台地部分を除いて、約 2,000m²/人 以上に近い。特に 2,000~2,500m²/人 が全体の36パーセント, 2,000~3,500m²/人 では54パ

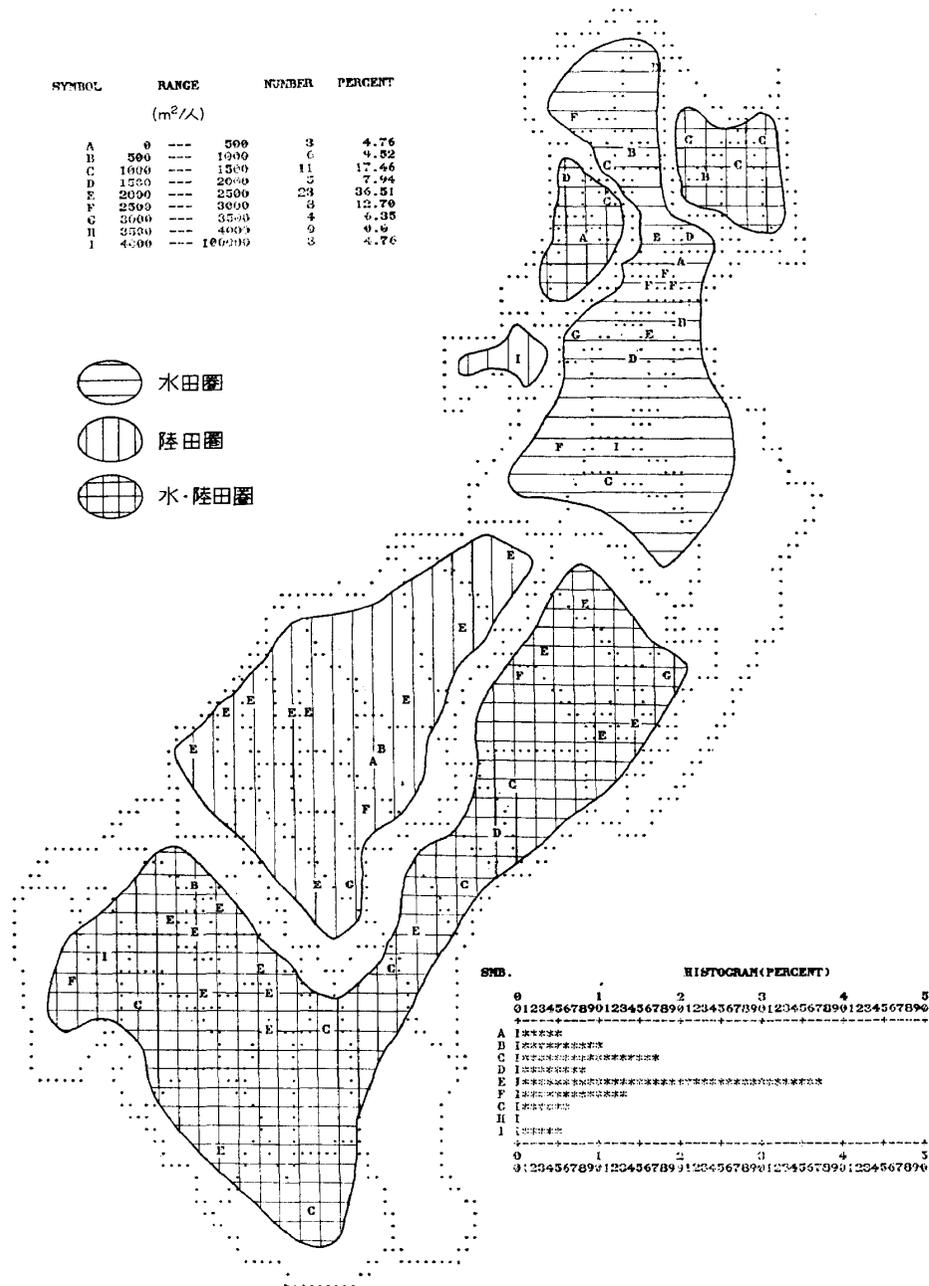


図7 水・陸田面積 (m²/人)

農産物にゴムとコーヒーがある。次にこれらの地域的な分布をみてみよう。

コーヒー(10 m²/人)の分布は山地および開析丘陵地域に限定される。(図8)すなわち、コムリン川のムアラドゥア上流部に限定される。こうした地域に限られて分布することは、一方では、植民地施策上のことも大きな原因

であろうが、立地上特性も大いに関与しているものと考えられる。これら2地域が、それより北部と明らかに地域特性が異なっていることから推察できる。

一方、ゴム(0.1m²/人)の分布については図9に示すとおりであるが、コムリン川流域にはほとんどみられず、バトゥラジャを中心

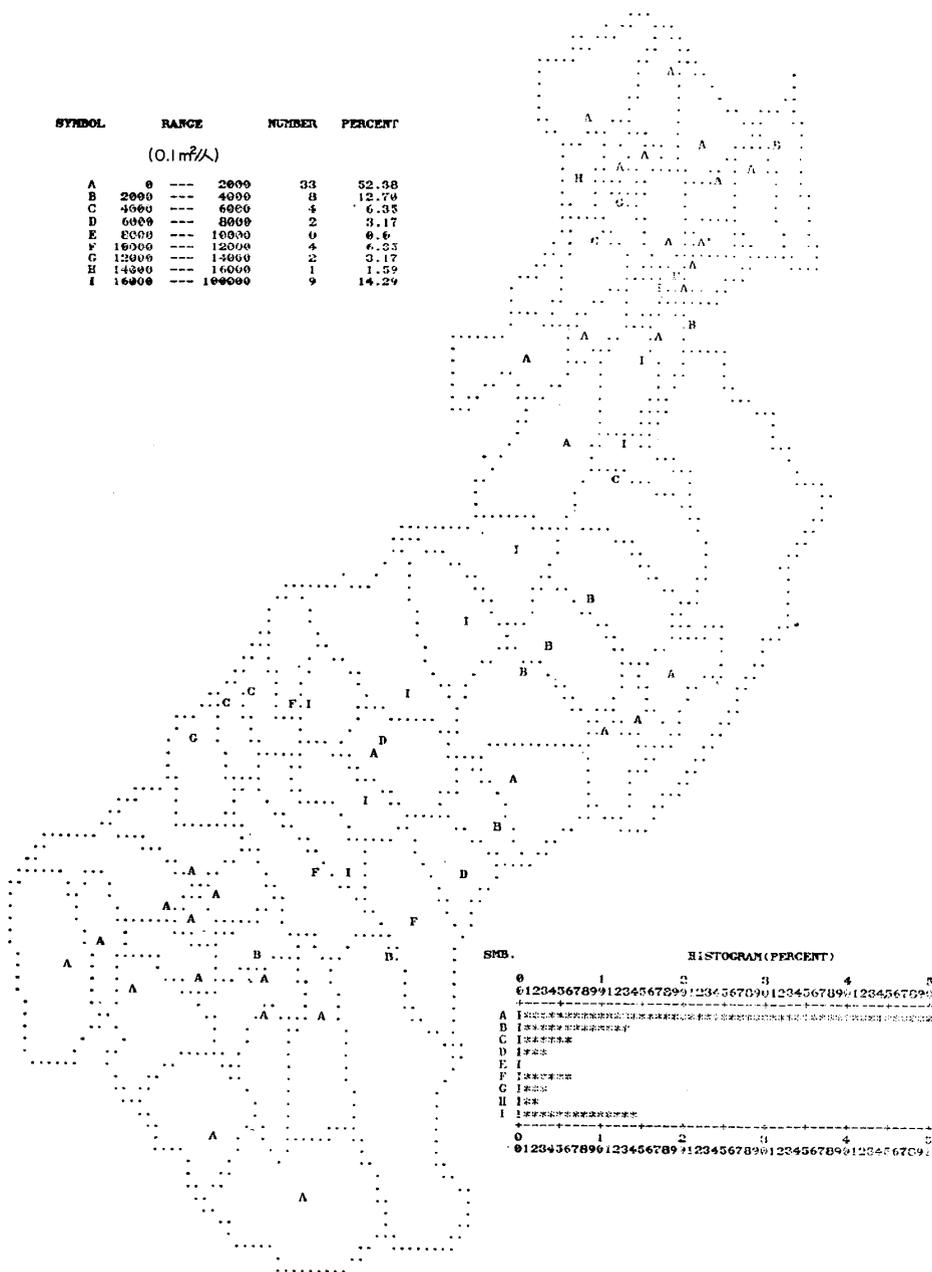


図9 ゴム栽培面積(0.1m²/人)

北村：コムリン・オガン川流域の地域構成

とするオガン水系の陸田地域にみられる。密度としては約 1,000m²/人 以上が、ゴムの産地特性を示している。このゴムの分布でも、バトゥラジャを中心とするオガン川周辺は一つの圏域を形成しているとみられる。

IV-3 生活

生活の水準について、電話台数、テレビ台

数、道路などを調査したが、明確なデータとなつてこなかった。図10に示すようにテレビ(台/1,000人)の分布図が得られたが、それらは人口集積地にみられることがわかる。さらに住宅などについての検討が必要であったが、地域計画構想レベルの地域構成分析上は生活に関する地域構成は人口集積度を判断するに留めた。

SYMBOL	RANGE (台/1000人)	NUMBER	PERCENT
A	0 ---	1	39 61.90
B	1 ---	5	8 12.70
C	5 ---	10	3 4.76
D	10 ---	15	3 4.76
E	15 ---	20	0 0.0
F	20 ---	25	3 4.76
G	25 ---	30	1 1.59
H	30 ---	35	0 0.0
I	35 ---	40	1 1.59
J	40 ---	45	1 1.59
K	45 ---	50	0 0.0
L	50 ---	1000	4 6.35

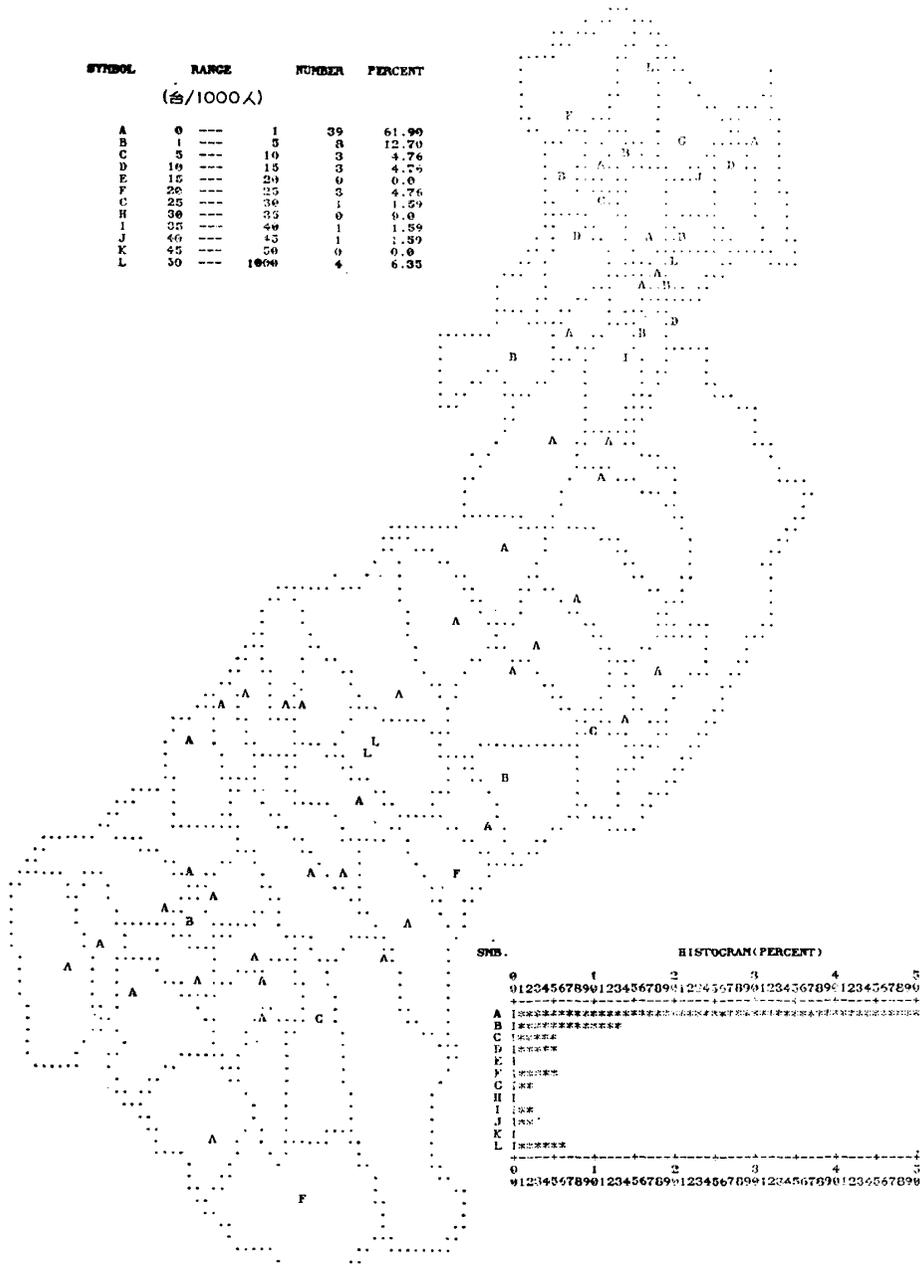


図10 テレビ分布図(台/1,000人)

IV-4 交通

交通は等質的地域相互に結節性を付与することで重要な要因である。したがって、地域構成をみる上で交通量調査などが必要となるが、調査時間の限界から、交通路線についての自動車の通行難易度を実態的に確認することで代替するに留まった。

図11は地域内交通路線の主な通行難易度である。このコムリン、オガン流域で上下流を結ぶ、かつての交通はまさにコムリン、オガン両河川であった。したがって、集落も、すでに述べたとおり河川沿いに立地している。山地部で道路を使用した馬などの交通がややみられる。こうしたことから、先に述べた地域社会構成が河川水系を軸に出来上がっているとみられる。

一方、近年になり、鉄道、道路の発達から新しい交通手段が生まれ、河川—集落系の交通体系から、道路—集落系の交通体系に移り変わり、今日では、地域間の結節性は順次道路—集落系に移行しつつある。したがって、本地域のもっとも大きい結節軸は、パレンバン—インドララヤ (Indralaya) —タンジョンラジャーカユアグン—チュンパカ—マルタプラ—シンパン—ラナウ湖という軸である。一方、オガン・コムリン両水系を結ぶものはタンジョンラジャーカユアグンとバトゥラジャーマルタプラ、シンパン—バトゥラジャ程度である。

オガン系の結節性はムンダラ (Mendala) まで鉄道があり、一定の役割を果たすが、その後鉄道が本流域外へ出るため、オガンの旧河川沿いの結節性は弱い。バトゥラジャからスギワラス (Sugiwaras) を越えラハット (Lahat) 方面の道は予想以上に悪い。またキ

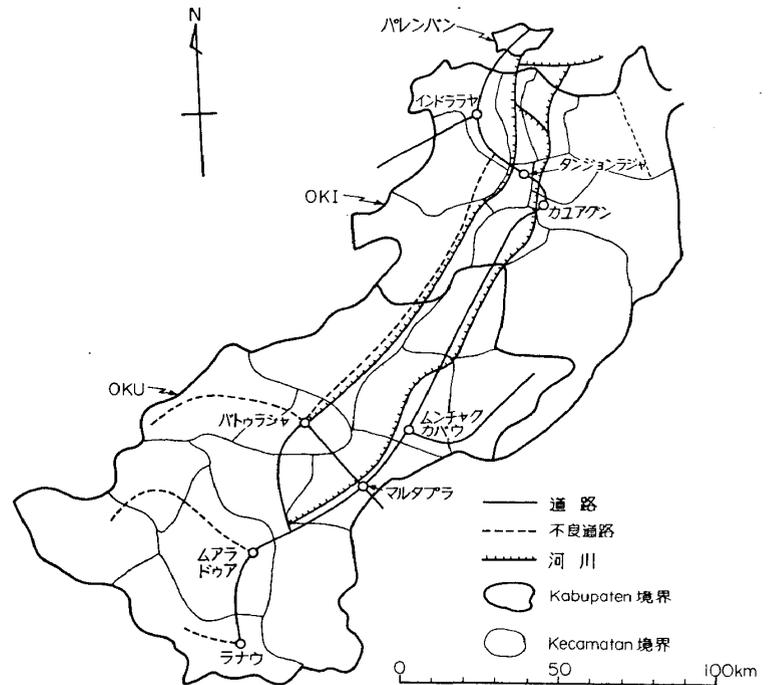


図11 道路・水路図

サム (Kisam) とシンパンとの結節性も道路が悪くあまり高くない。

こうした地域内の結節性を人口集積との関係でみると、OKI にはパレンバンを中心とした圏域とタンジョンラジャーカユアグン圏域が形成されている。そして、特に最近ではインドララヤが道路の関係から要所的位置を占めるようになり、かつてのパレンバン—ムルタン—タンジョンラジャの軸がパレンバン—インドララヤ—タンジョンラジャへ移行しつつある。それにともない、シラプラウパダンなどで道路が無いために人口集積度がやや下落しつつあるところがみられる。

OKU ではバトゥラジャとブアイムカバンサラジャ、マルタプラが中心地で、交通はほぼ従来からのものに留まっている。しかし、今後はマルタプラがランボン (Lampung), ラハット, パレンバンの三つの方面への分岐点となることから、交通上の要所となってゆくであろう。

V 地域構成の総括

上述したいくつかの地域構成を総括的にとりまとめ、合わせて各サブ地域について若干の特性評価を加えておこう。

V-1 地域の構成

II, III章で述べた各要因別地域構成を、IV章の地域別生産特性を参考にして総括してみると、図12に示すとおりである。パレンバン北部の低湿地を含めると9地域(27サブ地域)に分けられる。その地域別特性の概要は表2に示すとおりである。

パレンバン以北はパレンバンと各 Kecamatan 単位のサブ地域に分けて考える。都市・工業化地域と未開低湿森林地域である。

OKI は低地ルバックを主体とする地域と周辺の台地または丘陵部に分けられる。中央の3-1はタンジョンラジャ、カユアグンという人口集積地の中心地である。

OKU の丘陵地帯はコムリン川とオガン川の水系で2分される。それぞれ、ブアイプムカバンサラジャ、バトゥラジャが人口の中心地である。

山地部はスムンド語系、ダヤ語系およびラナウ語系の三つの地域に大別される。このうち、ダヤ語系の地域が丘陵部との中間地帯に当たっている。

V-2 類型別地域特性

次に地域類型別にその特性を簡単に評価しておくこととしよう。

パレンバン地域(1-1)は台地となっている。そうした定住上の利点を見て上記のコムリン、オガン川上流の山地系民族によって都市化されず、むしろ海洋性民族により発達してきたとみられる。したがって、パレンバンには、山地、丘陵、低湿地とは全く異なった文化がみられる。特にインドネシア最大の石油産業の立地がその異質性を一層強めている。しかしながら、その台地的特性をもつ地域はシラプラウパダン、ジェジャウィ、クマン、パンパンガンを含めてもそれほど広域ではない。

こうした定住上重要な自然的立地条件は今日、十分に考慮することが大切である。

パレンバン北部の未開地は低湿地であり、定住上の立地条件は必ずしも好ましい地域とはい

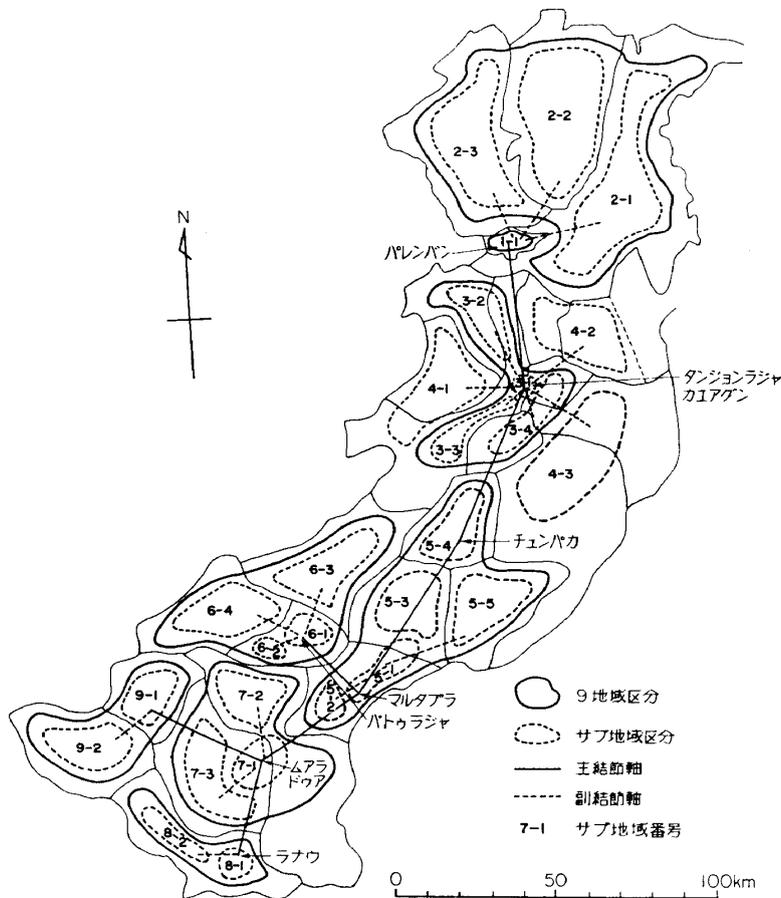


図12 地域構成図

えない。現在あるウパン (Upang) を中心とする潮汐灌漑を考慮した移住計画も、地域計画的観点からするとまだ十分検討すべき課題が多い。

第3ブロックは本対象地域の中で特に興味深いルバック文化圏の中心地である。コムリン—オガン両川の最近接点で、河川交通を唯一の交通手段とした時代では、そうした点に人口集積がみられるのは当然のことである。現在もタンジョンラジャ、カユアグンはパレンバン、マルタプラ交通の要所となっている。この地域の開発の課題はまさにルバック開発であるが、何分広域に及ぶので、その開発の順序はルバックの特性を踏まえて慎重に検討する必要がある。しかも、その開発に当っては、道路交通のあり方が開発の要となる。今日までの水路交通体系から道路交通体系に急転換を迫られることとなる。そのために生じ

てくる地域社会内における細かい結節性が大転換を迫られることになり、ひいては地域社会全体の構造変化につながってくる。インドラヤーパレンバン道路近傍において、この現象がすでに生じている。こうした点を十分考慮に入れて、ルバック開発の方策を講じ、より生産性の高い地域形成を図るべきところであろう。ルバック開発に関連して、集落近傍地には開発余地がまだまだ残されている。この際、単なるルバック開発のみを実施するのではなく、集落近傍にある畑地、樹園地開発、集落の居住環境の整備などを総合的に推進することも重要な地域開発の課題であるといえる。

また、この地域は閉塞低地、広域排水不良地帯であるので、広域的排水処理を考慮しなくてはならない地域である。

OKU の第5地域は丘陵域のコムリン川中

表2 地域特性

地区	中心都市(集落)	人口 (千人)	言語	水稲田	コーヒー	ゴム	開発特性 パターン
1	Palembang	680*	(マレー系)	/	/	/	都市
2	Sungsang—Upang	35*	(マレー系)	/	/	/	低湿地
3	Tanjung Raja— Kayu Agung	276**	コムリン, オガン	水田	なし	少々有	ルバック
4	同上	174**	オガン	水田+陸田	なし	多	ルバック+ アランアラン
5	Muncak Kabau— Martapura	353**	コムリン	水田+陸田	少々有	有	ルバック+ アランアラン
6	Batu Raja	124**	オガン	陸田	少々有	多	アランアラン
7	Muara Dua	85**	ダヤ (コムリン系)	水田+陸田	多	なし	山地+丘陵
8	Muara Dua Kisam	35**	スムンド (マレー系)	水田+陸田	多	なし	山地
9	Simpang Sender	73**	ラナウ (コムリン系)	水田+陸田	多	なし	山地

* 南スマトラ統計書(1976) ** 調査データ(1978)

流域である。この地域はかつて、コタヌガラ (Kotanegara), チュンパカを中心とするコムリン語圏である。コムリン川周辺は古川によれば内陸河谷平野で、オガン川水系と異なり、かなりのルバックが残っている。したがって、この地域は第3地域と似て、ルバック開発、交通路開発が大きな課題といえる。ここは第3地域と異なり、ルバックの周辺にアランアラン (alang-alang) の丘陵がある。したがって、この地域の開発には次の第6地域における開発と同様の問題が含まれている。

第6地域は陸田中心に発達した地域であり、オガン川流域である。バトゥラジャを中心にして今後の開発が待たれているところで、バトゥラジャ近傍の移住計画は新しい試みである。この移住計画はウパンの場合と異なり、集落のまとまりを中心に考えられており、その成否が今後の新しい鍵でもあろう。またこの地域とパレンバンへの交通路の整備が不十分である。

第7地域はダヤ語系、コーヒー生産があり、

コムリン水系が中心で、オガン水系とは異なった地域である。また、第8、第9地域の山地域と比べて傾斜がゆるく、いろいろな意味の農業開発の方向が求められる地域である。ムアラドゥアを中心に今後の展開を模索すべきところである。

第8地域はコムリン川の一つの最上流域であるが、いろいろな点で他の地域と異なる特徴をもつ。高地マレー語のスムンド語系の山地族である。水田だけでなく、陸田もあり、コーヒーもあり、いろいろなものが混在して一つの文化圏を形成している。

最後の第9地域は一部にスムンド語圏を含むが、地形的な条件から一つのまとまりある地域とみるのが妥当である。ラナウ湖あたりは生活の環境もよく、避暑地的なところであり、温泉も出る。将来的にはレクリエーション地域としての視角からも検討する必要のある地域である。農業はコーヒーが中心で、比較的安定的な地域である。

VI 考 察

地域計画構想を作成する上で基礎となる地域構成の分析を、コムリン・オガン川水系について試みた。調査期間、資料、調査技術などの限界から十分な成果を得られなかったが、それにつき若干の考察を加えておくこととしたい。

(1) 自然的地域構成と社会的地域構成の関係 Kecamatan 程度の規模であれば、自然的地域単位と社会的地域単位が非常に近似していることが認められた。したがって、地域計画構想の作成に当っては、自然的地域構成と社会的地域構成の関係性を十分尊重しておくことが大切である。

(2) 経済活動と地域構成 この分析では経済活動の分析はデータの関係から断念しな

くてはならない面が多く、推論の域を出ない。しかし、構想作成レベルであれば、特に問題にならないと考えられる。むしろ、経済活動の分析もこうした地域構成を基礎にすべきところであろう。

(3) 地域構成のための地域要因 本研究において調査した地域要因はいろいろと重ねて20種以上になるが、実質的に地域区分の上で有用であった要因は、水田と陸田、およびコーヒーの分布と地形、土壌条件など5種類程度である。調査データ数に比べ、実質的な要因は極めて少ない。このことから、このような計画目的にそった地域構成の分析においては、注意深い地域観察で要因を限定しても、結果にさほど影響しない。したがって、そう

した場合の技術的経験の蓄積は重要と思われる。

(4) Marga データの有用性 Marga から直接データを集めることは危険であったが、

本分析においては相応の有用性は認められた。問題は調査技術上の点検のくりかえしにかかっている。

あ と が き

発展途上国における地域構成分析は初めてであったが、上述したいくつかの問題点はあるが一応の成果は得られたと思う。本地域の

地域計画の構想を作成上で、何らかの参考になると幸いである。

参 考 文 献

1. 山田勇; Soekardjo, Sukristijo. 1979. 「南スマトラ低湿地の森林植生」『東南アジア研究』17 (3): —
2. 古川久雄. 1979. 「南スマトラ低地部の土壌」『東南アジア研究』17 (3): —
3. 海田能宏. 1979. 「南スマトラの自然環境区分」『東南アジア研究』17 (3): —
4. 高谷好一. 1979. 「南スマトラ, コムリン川流域の稲作景観」『東南アジア研究』17 (3): —
5. 坪内良博. 1979. 「南スマトラ, コムリン川流域およびムシ川下流部における集落形成史」『東南アジア研究』17 (3): —
6. 三谷恭之. 1979. 「南スマトラ州の言語」『東南アジア研究』17 (3): —